


先週私たちは、ピシデヤのアンテオケにおいて、パウロとバルナバが語った救いのことばに対する人々の応答を見ました。永遠のいのちに定められていた人々は、それを聞いて喜び、神のことばを賛美し、信仰に入りました。そして、喜びと聖霊で満たされていたのです。それがあっての「主のことばが、その地方全体に広まった」ということをお話しました。一方、パウロたちの話に反対するユダヤたち、つまり、自分で自分を永遠のいのちにふさわしくない者と決めた人たちは、町の上流階級の人たちを扇動し、パウロたちを迫害させ、その地方から彼らを追い出したのです。

今日もその続きを見ていきますが、アンテオケを追い出されたパウロたちは、イコニオムという町に行きます。そこは、アンテオケから南東 144 キロに位置し、エペソ及びローマへの要路の途中にあることから、昔から栄えていました。1-7 節までにそこでの出来事が記されています。また、そこから南 40 キロに位置するルステラという町での出来事も 8 節以降に記されていますので、 地図でそれぞれの場所を確認しましょう。

1-2 節 「イコニオムでも、ふたりは連れ立ってユダヤ人の会堂に入り、話をすると、ユダヤ人もギリシヤ人も大ぜいの人々が信仰に入った。2 しかし、信じようとしなないユダヤ人たちは、異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対し悪意を抱かせた」。ここでもパウロたちは、ユダヤ人の会堂に入り、そこでみことばを語ります。すると、ユダヤ人もギリシヤ人（ユダヤ教の改宗者）も、大ぜいの人々が信仰に入るのです。

ところが、ここにも良い知らせを信じようとしなないユダヤ人たちがいて、彼らは異邦人たちをそそのかして、パウロたちに対して悪いを抱かせます。けれども、3 節 「それでも、ふたりは長らく滞在し、主によって大胆に語った。主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行わせ、御恵みのことばの証明をされた」。この時点で、反対者たちは、悪意を抱くことはあっても、実際に手を出すことはなかったのです。パウロたちは主によって大胆に語り続けます。この「長らく」というのが、どのくらいの期間であったかはわかりませんが、主もまた、彼らの手にしるしと不思議なわざを行わせることで、その御恵みのことばの証明をされるのです。つまり、人々は、主のことばを聞くだけでなく、しるしと不思議を通して体験的に知ったのです。

4-7 節 「ところが、町の人々は二派に分かれ、ある者はユダヤ人の側につき、ある者は使徒たちの側についた。5 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちといっしょになって、使徒たちをはずかしめて、石打ちにしようと企てたとき、6 ふたりはそれを知って、ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、7 そこで福音の宣教を続けた」。

パウロとバルナバの宣教を通して、町の多くの人々が彼らの側につくようになります。そして、町は彼らの側につく者と彼らに反対する者たちにつく者とで、二派に分かれてしまうのです。そのような中で、反対者たちは、使徒たちを辱めて、石打ちにしようという計画を立てます。「石打ち」ですから、彼らは自分たちの律法に従って神への冒瀆罪でパウロとバルナバを殺そうとしたということです。けれども、その企てをパウロたちは知り、ルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、そこで福音宣教を続けるのです。

これまでも見てきましたが、このところからも、神様は、迫害を避けることを禁じていないことがわかります。もちろん、人を恐れ、迫害を恐れるゆえに、福音を語らないというなら、それは問題です。主イエスがその人にとって福音となっていないからです。でも、福音を語る中で、反対する人がいて、その人から迫害されるのを避けることは、当然の応答と言えるでしょう。ただ、次の箇所に記載されているように、パウロはこの後、石打ちにされます。つまり、難を避けることができる時とそうでない時とがあるということです。

私たちに与えられている使命は、福音を語ることです。迫害者たちを、何が何でも力づくで悔い改めさせ、救いに導くことではありません。みことばを語るのは私たち、でも、人の心に働きかけられるのは、主です。ここで起こっていること、それはピシデヤのアンテオケで起こったことと似ています。つまり、主イエスの良い知らせ、救いのことばが語られる時、そこには信じる者がいれば、反対者もいるということです。ユダヤ人だから、必ずしも反対するわけではなく、異邦人だから信じるわけでもありません。みことばを聞き、それを喜び、賛美する人は信仰に入り、みことばが何度語られても、聴く耳のない人は主を拒むのです。

そして、そのことは今日も同じといえます。ですから、私たちは、どれだけ多くの人が教会に加えられたか、という結果ではなく、自分たちはどれだけの人にみことばを語り続けているのか、というプロセスに重きを置くべきです。語っていなければ、当然、信じる人も起こされない。でも、語り続けるならば、信じる人は起こされるのです。私たちには誰が主を信じるかはわかりません。でもだからこそ、私たちは、みことばを語るべきであって、もし私たちのうちに主のみことばを喜び、賛美する心があるならば、みことばを語るのです。反対に、それがなければ、誰もみことばを語りません。

聖霊によって語られ、遣わされ、満たされていたパウロとバルナバは、みことばを賛美する者たちであったので、どこであっても、彼らはみことばを語り続けるのです。8-10 節「ルステラでのことであるが、ある足のきかない人がすわっていた。彼は生まれつき足のなえた人で、歩いたことがなかった。9 この人がパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て、10 大声で、『自分の足で、まっすぐに立ちなさい』と言った。すると彼は飛び上がって、歩き出した」。

ルステラには、ユダヤ人があまりいなかったのか、パウロたちが「ユダヤ人の会堂でみことばを語った」とは記されていません。ですから、それがどこであったかはわからないのですが、ただ、パウロがどこかで話している中で、それに耳を傾けていた人がいました。その人は「生まれつき足のなえた人で、歩いたことがなかった」のです。パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て、彼をいやしたというわけですが、皆さん、「いやされる信仰」とは、どんな信仰ですか？パウロは、この人のうちに、それを見た、というのですが、果たしてそれはどのようにしてであったのでしょうか？

例えば、福音書には、十二年間長血を患っていた女性が、「主イエスの服に触ることでできれば、いやされる」と信じ、実行することで、いやされたことが記されています。また百人隊長が、自分の部下のいやしを信じて、主に「おことばを下さい」と求めた時、彼の部下は、主のことばによっていやされたのです。彼らの信仰を思う時、あなたはそこに何をみますか？この両者の共通点、それは「主イエスには、それがおできになる」と信じたところではないでしょうか？「服にさわるといやされる」とか「ことばだけでいやされる」と信じることは、主イエスのことを知らない人にとっては、馬鹿げたことでしょう。でも、主イエスのことを聞いた時、彼らは主をそのようなお方として信じた。そして、信じた彼らは、主によっていやされたのです。

ここでパウロが見た「いやされる信仰」とは、そのように主に期待するものであったと思います。つまり、パウロが話していたこと、それは主イエスのことについてであったはずですが。そして、主イエスのことが語られるところでは、当然、父なる神様のことが語られる。いかに主がすばらしいお方であり、恵みと真実とで満ちたお方であるかが語られていたことでしょう。この足のなえた人は、その語られることをそのまま素直に信じたのではないかと思います。その証拠として、パウロに「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言われた時、「いや、それはできません。私には無理です」と拒むのではなく、彼は立ち上がるのです。彼が「飛び上がって、歩き出した」ということは、彼がその語られたことばに従ったということです。

ところが、11-13 節「パウロのしたことを見た群衆は、声を張り上げ、ルカオニヤ語で、『神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ』と言った。12 そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼んだ。13 すると、町の門の前にあるゼウス神殿の祭司は、雄牛数頭と花飾りを門の前に携えて来て、群衆といっしょに、いけにえをささげようとした」。

パウロのしたことを見た群衆は、そこに人間を超えた神の力を見、こう言います。「神々が人間の姿をとって、お下りになった」と。すると、ゼウス神殿の祭司が、雄牛と花飾りを携えてきて、群衆とともにいけにえをささげようとするのです。「ゼウス」とは、ギリシャ神話の主神で、「ヘルメス」は、ゼウスとマイヤの間に生まれた子、雄弁な者の守護神といわれています。町の人々は、なぜこのようなことをしたのでしょうか？それは、この町に関連のある神話で、ゼウスとヘルメスが人間の姿をとって地上に下って来たことが伝えられていたからです。そのことを知ったパウロたちは、それを止めさせようとして群衆に語ります。

14-18 節「これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは、衣を裂いて、群衆の中に駆け込み、叫びながら、15 言った。『皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたが

たがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とそこにあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。16 過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。17 とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです。』 18 こう言って、ようやくのことで、群衆が彼らにいけにえをささげるのをやめさせた」。

ここでの人々は、ユダヤ人ではなかったので、パウロの語り方にも変化が見られます。つまり、ユダヤ人の先祖たち、ダビデ王、預言者たちのことばといったものではなく、神様が、天と地と海とそこにあるすべてのものをお造りになった想像主であること、また、それに関連して、神様が天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで人々の心を満たして下さる恵みの方であることを伝えるのです。そのようにして、ようやくのことで群衆がいけにえをささげるのをやめさすことができたわけですが、ここで私たちは、パウロたちがなぜ自分たちは福音を宣べ伝えているかと語っていることばに心を留めたいと思います。

もう一度 15 節を見て下さい。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とそこにあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです」。パウロは、なぜ福音を宣べ伝えていると言っていますか？それは福音によって、それを聞く者が、「このようなむなしいことを捨てて」、「生ける神に立ち返るよう」になるためです。日本語では「捨てて」という語がついていますが、つまり、それは、福音は、それを受け入れる者を、むなしいことから、生ける神に向きを変えさせるというのです。

このことはすでに信仰をもっておられる方にとっては、何度も耳にしてきたことでしょうか。では、現実はどうですか？あなたは、むなしいことを捨てて、生ける神に立ち返って生きておられますか？つまり、そこには生ける主を愛し、主に仕えることを妨げるような自己中心な生き方や偶像の神は存在しないですか？パウロの行っていたやしを見た群衆は、確かにそれを人にはできないこととして、神のわざであると受けとめました。ところが、彼らは、生ける神のことを知らなかったの、これまで彼らが信じてきたもの、つまり、ギリシャ神話に基づいて行動したところ、それは偶像の神にいけにえをささげるといったものになったのです。

この彼らのリアクションはある意味で仕方のないことと言えるでしょう。彼らは、まだ生ける神様のことを知らなかったからです。では、あなたはどうですか？ここにはクリスチャンホームで育った人もいれば、私のように、大人になってから主イエスを信じた人もいることでしょうか。あなたは、主イエスを信じることで、生ける神様の方に向きを変えたということが、それまでの古い習慣や考え方から離れることだと理解しておられますか？それゆえに、それらを捨て、主イエスにある新しい愛の生き方へと進んでおられるでしょうか？

「過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました」とパウロが言うように、神様は、実に忍耐深いお方です。ですから、私たちのうちに、少しでも「むなしいこと」としての罪や偶像が残っていたら、それで終わりだとされる方ではありません。でも、その罪をそのままにしておくと、結局、それが罠となり、主から離れさせることになるゆえに、主はそこから向きを変え、ご自分に聞くこと、つまり、みことばを通して主イエスに聞くことを迫られるのです。

私たちが、むなしいことを捨て、神様の方へ完全に向きを変えることができたなら、赦されるのではありません。福音により、つまり、神の御子であり、救い主イエスが、不信仰で、不従順な私たちのために十字架にかかって死んで下さることで、罪人に対する神のさばきをすでに代わりに受けて下さったので、私たちには赦しが恵みとして与えられているのです。神様に立ち返った後も、主から離れ、むなしいことに戻るといった現実がありながらも、赦しが恵みとして私たちに与えられ続けるのは、この救い主イエスのゆえ、それが福音です。

ですから、私たちは、主を侮ってはいけません。この赦しを逆手にとって、「まだ大丈夫。どうせ赦されるから」といってはいけないのです。なぜなら、そのような人は、主の十字架、つまり、福音の意味がわかっていない証拠です。でも主の福音を聞き、その赦しを感謝して受け取る人は、進んで主に聞き従うことで、恵みの世界へとよいよ導き入れられていきます。そして、やがての日に栄光に満ちた天の御国を受け継ぐのです。